

東京丸の内1998



星霜 敦

ある平凡な一日の幻影

東京駅丸の内口が日本の正面玄関であることに異を唱える人は、そうはいないはずだ。その威厳に満ちた佇まいは銀座四丁目交差点にも、新宿アルタ前にも、渋谷駅前のスクランブル交差点にもないものである。いつ訪ねても整然として、すまし顔でいる。由緒ある企業のビジネスマンにしか用はないよ、とでも言うように行き交う人々を見下ろしてきた。その象徴が駅正面に鎮座する丸ビルと、皇居へと向かう行幸通りである。

道幅百メートル近い行幸通りは、わが国が再び日露戦争のような大勝利を遂げたとき、英雄たちが凱旋行進することを想定し設計された。さもありませんという贅沢なつくりである。あのバブルの時代でさえ、この土地を有効利用しようとする者はいなかった。おそれ多くてそんな気持ちになれないのである。

行幸通りをはさんで右手が新丸ノ内ビル、左手が丸の内ビル（丸ビル）であったが、かつての丸ビルはもうない。丸ビルが取り壊された九八年、この地のゆがみは極限に達していたのかもしれない。変な言い方だが、他の地域とあまりにも

違っていたのだ。

行幸通りは往復六車線で中央部は空地になっている。空地には簡単に入れるが入ったところでぺんぺん草があるだけである。言ってみれば、そこは大東京の台風の目、真空の中心である。明治末年に東京駅ができるまで、このあたりは三菱ヶ原というだけ広い空地であった。そう思ってみれば、その面影はある。休日の夜ともなれば、ビジネスマンが気づかない三菱ヶ原の顔を見せるのである。

私がそこに足を踏み入れたのは、その年のまだ残暑を感じる時節で、日曜日の深夜であった。急ぎの郵便物を投函するため、深夜も開いている東京中央局に行った。その帰り、突然消えてしまった丸ビル跡を見て、思い立ったのである。

工専用パネルで囲われた丸ビル跡に近づき、門扉のすき間から中をのぞくと、コンクリートの地べたから赤茶けた鉄骨とぐにやぐにやに切断された鉄筋が見えた。優美だった丸ビルも、こうなつては無残としかいいようがなかった。私がそこにいたのはほんの数秒だったが、八年たった今でも、その光景は鮮明に覚え

ている。

私は逃げるように行幸通りを渡り、並木の向こう側に郵船ビルを見ながら、皇居の方へ歩いていった。鼓動が高鳴り、ひざが浮くように感じた。子供の頃、親に「行ってはいけないよ」と言われたところに行つたときのような気持ちであつた。

前方は深い闇に包まれている。日比谷方面を見ると、高層ビルの上に満月が浮かんでいた。月さえも、大東京の飾りのように見えた。

日比谷通りは三途の川のように思われたが、ただの道路であるというもう一人の理性的な私の意見に従つて通りを渡り、馬場先濠のあたりまで進んだ。

もう帰ろうと思つたそのときである。並木の陰から突然、紺のスーツに白いワイシャツの男が現れた。

跳び上がりながらに動転し、その場に釘付けになつた。輪郭のあいまいな顔が小さくうなずいた。そうはしたくなかつたのに、私はぺんぺん草の中に入って

いった。

「こんばんは」笑顔で近づいた。

「お散歩ですか」初老の紳士が、口元に笑みを浮かべた。

「まあ」

白髪混じりの頭髮は、きれいに整っている。

「この辺の会社の人ですか」

「いえ、違います」

「飲みませんか」

「……」

並木の下に膳があり、銚子と猪口が乗っている。

「ここで飲んでいたんです。一杯どうですか」

男は猪口を差し出し、

「座りましょう」という。逆らえない気がした。男の向こう側に満月がある。そ

の顔は整っているが特徴がなく、かすれているように見えた。

日比谷の方を向いて、二人で並んであぐらをかいた。一口だけ付き合っただけで帰るつもりだった。猪口の酒を飲み干すと、体の中になつとりとした生臭いものが入った気がした。

「僕は丸ビルに三十八年間通いました。あんな大きなものが、僕より先に消えるなんて思いもしませんでした」

満月がいよいよ輝きを増している。月明かりを浴びる東京駅が生き物のように見えた。

「丸ビルは寿命ではなかったが壊されてしまった。それは運命。人間も同じ。いくら若い、元気だと言っている、死は、突然やってくる……」

念仏でも唱えるように言ってから急に口調を変えた。

「三十八年ですよ。二十二歳から六十歳まで、あそこに通い続けただですよ。よくやったなあ。われながら。まあ、そんなに出来るビジネスマンじゃなかったけ

ど、僕としては、これが精一杯だったんだ。結婚して、人並みに子供二人を育てた。長女はまもなく結婚するし、長男の就職も決まった。まあ、一通り一丁上がりですよ。

その間、ずっと丸ビルに通い続けた。今となってみれば、つい先日のように思われるんだけどね。女房も丸ビルからもらったんですよ。社内結婚だから、知り合ったのもあそこ、デートの約束をしたのも、二人で結婚式の打ち合わせをしたのも、丸ビルの地下の喫茶店でしたよ」

男はお猪口の酒を一気に飲み干した。私は男の隣で丸ビル跡の工事現場を見ていた。そこはまもなく超高層オフィスビルが建つ予定だが、今はまだいきなり開けた空間が居心地悪そうに、まるで「ここはどこ？」とでも言いたげにしている。その先の闇に星が三つ、弱々しい光を放っていた。

三十八年間の会社勤めを終え、子供も大人になった。平穩無事な半生のゴールではないか。それなのに男の横顔は、底知れぬ寂しさを漂わせている。

「思い出の場所が消えてしまいましたね」

「感傷にふけていているわけじゃないですよ。まだまだ、思い出の中に埋もれてしまいたくない。そう思って今夜、ここに来たんです。実は今日、還暦を迎えたんです。還暦というのは一回りして、もう一回繰り返すという意味があるんですよ。この節目に、もう一度と思っているんです。今、僕は青年のようにきうきしていい」

「何か、始めるんですか」

「ベンチャービジネスです。心臓。ペースメーカーの企画、製造、販売会社を来春に始めます。この方面には詳しいんです。一流の技術者も知っているし、腕のいい職人も知っている。自分に合う心臓がなくて困っている人がいるのも知っています。事情がわかっているから、何とかできるんじゃないかと思っているんです」と、そこで言葉を切り、一段低い声で続けた。

「心臓が止まってしまう時は、切ないものですよ……」

「ベンチャーなんて、楽しみですね」最後の言葉を無視して言った。

「子会社の部長という選択もあったけど、よっぽど考えて、断った。老後まで、会社の世話になれるか。退職金は三千万円。ありがたく頂戴し、オサラバした。女房に最後のわがまを言って、一千万円をもらって、これを元手に始めます。今ビジネスプランを練っているところです。うまくいけばベンチャー・キャピタルからおカネが出るかもしれません」

右手の皇居は闇の中に沈んでいる。行幸通りは、時折おもむろに現れるタクシ―が走り去ると、再び深閑とする。

「あと十年はがんばる。で、七十歳になったらハッピーリタイヤメント。気ままに海外旅行でもしながら、好きなことをやって、体力がきつくなったら老人ホームに入る。いよいよ、お迎えが来たら、あまり苦しまずに、蒲団の上で、あっさり逝き、多摩に買ってある小さな墓に入る……」

「人間はなぜ生きているんだ」